

20世紀初頭のハワイにおける曹洞宗

浅井 宣亮

はじめに

本論文は、20世紀初頭つまり日系一世が社会の中心であった時期に、ハワイにおける曹洞宗の状況を明らかにすることを目的とする。そしてハワイにおける曹洞宗の状況をよりはっきりさせるため、2つの側面から日系1世に対する曹洞宗を観察することにする。それは、日本にとってのハワイ開教とハワイにとっての曹洞宗という2点である。

1で簡単に当時の社会状況を概観した後、上述のように開教師の背景、日本からの訪問者、教団組織に焦点を当てていく。そして、開教師にとって、また開教師を派遣した日本曹洞宗にとってハワイ開教がどのような意味を持っていたかを考察し、ハワイ社会やメンバー側にとって曹洞宗はどのような位置づけであったのかを推論する。

2では開教師の背景に焦点を当てる。これはハワイ開教に対して日本曹洞宗はどのような姿勢を示し、それがどのような意味を持っていたかを明らかにするためである。

3では日本からの訪問者を3名取り上げる。彼らはハワイ曹洞宗に影響を与えた者達である。その活動を振り返ることにより、どのような影響を教団や社会に与えたのかを考察する。

4では布教所・教団の組織に対して焦点を当てる。曹洞宗は禅宗であり、坐禅そして宗祖である道元の教えをその中心とする。伝統的日本仏教の一派である曹洞宗がその独自性を表に出した布教スタイル

と、日系移民が僧侶に期待するものとの間に違いがあることは想像に難くない。

そして日本曹洞宗が海外布教をおこなう際に、布教対象の要望によってスタイルを変化させる事例も珍しくない。例えば、日本において曹洞宗は、先祖供養を基本にしている。僧侶の主な活動はメンバーの先祖供養であり、坐禅にさく時間はそれよりも少ないのが通例となっている。寺院収入も先祖供養を執りおこなうことから得ており、坐禅会などからの収入が寺院収入の中心となっている寺院は、日本ではほとんど存在しない。しかし、アメリカ特にメインランドの禅センターでは、坐禅を組むために訪れる者が支払うお金、センターの収入の中心となっている場合が多い。これはメンバーの要望が日本における曹洞宗檀信徒の要望とは異なり、彼らの先祖供養ではなく坐禅を組むことであったため、それに対応して活動スタイルが変化したとみなすことが出来る¹⁾。

砂糖耕地などで厳しい労働が課せられていたハワイ日系移民にとって、坐禅や道元の説く難解な宗教哲学そして先祖供養より、現世利益や救い、教育の方が重要であったと、筆者は考える。したがって布教スタイルの変化が、日本とは社会事情が異なるハワイ日系一世社会で起きた可能性は高い。

Hawaii Soto Mission Centennial Celebration のパンフレットではハワイ曹洞宗の初期の特徴が次のように指摘されている。

砂糖耕地社会と仏教寺院

1・2世日本人と、寺檀制度の延長線上に守られて来た宗教習俗

観音信仰と各地で行われた観音講

開教師の経済生活を支えた日本語学校²⁾

1 ハワイ日系移民事情

ハワイの日系移民は、1868年6月19日横浜駐在領事 Van Lead の幹
(2)

旋で、東京横浜周辺の日本人労働者と、その家族150名が集団移民として、サイオト号（Cy Otto）で渡航したのが最初である。彼らは、1ヶ月（26日働き）で月給4ドルの3年契約の移民であった。しかし、諸事情によりその後18年間日本人の移民は日本政府により禁止された。

1885年日布両政府間の交渉により、労働移民約定書が調印され、官約移民の時代が始まる。同年2月8日山口県出身者を主体とした第1回移民船 The City of Tokyo で946名が到着した。6月17日には広島県出身者を中心とした第2回移民船で988名が移住し、本格的移住が始まることとなった。

以後、1894年までに官約移民29032名が月給15ドルの契約で移住した。その後は民間会社の斡旋による、私契約移民の時代に入り、1900年までに私契約移民40208名が移住した。

ハワイが米領となり、契約移民法が廃止された後も移住は続き、1908年に日本政府が渡航禁止とするまでに自由移民68326名が移住した。

しかし、当初の移住者の砂糖耕地での生活は厳しく、郷愁と期待はずれに、自暴自棄的な生活に追いやられるものも少なくなかったといわれる。このような日本人を鎮撫し救うものとして、移民を送り出した日本側、受け入れたハワイ側、日系移民の一部のものが、宗教に着目することとなった。そして、当初の宗教家は慰問師という名称で登場してくる。

キリスト教は1820年カメハメハ2世の許可を得て、米国伝道会社の派遣により5名、1823年には7名の宣教師が渡来した。1825年、十戒を国法として採用し、王家が帰依したこともあり、ハワイはキリスト教国となった。しかし、心の救済という面に関してはともかく、日本人移住者の郷愁をいやすという点においては、日本伝統宗教が適していた³⁾。

彼らに対する日本仏教各宗による布教活動の最初は、1889年の本

派本願寺の曜日蒼龍（かがいそうりゅう）大分県出身、であった。彼はホノルル市エンマ街に仮布教所を設けた。1896年浄土宗岡部学応（おかべがくおう）はハワイ島ハマクワ（the Hamakua coast）で仏教会（his ministry）を始めた。1900年には日蓮宗高木行運（たかぎぎょううん）がハワイ島で布教をはじめ、東本願寺も同年漣静（さざなみしずか）が布教をはじめた。

なお、曜日蒼龍の渡航以前にも、日本から仏教僧侶が幾人かハワイに渡っているが、仏教の伝道というよりも、一般移民と同じく就労を目的としていたと考えられるため、本論文では開教師とはみなさない。当時、曹洞宗の僧侶朝比奈泰吾（あさひなたいご）も渡航しており、1889年3月に曜日を訪ねた記録が曜日の『ハワイ紀行』中に記されているという報告もある⁴⁾。しかし、朝比奈が布教に従事した記録を、筆者は見つけることが出来なかった。

2 開教師に関する考察

曹洞宗の20世紀初頭のハワイ布教を振り返る場合、前期後期に分けることが可能だろう。前期は、砂糖耕地などの契約農民を布教対象とする時期である。当時、移民労働者の鎮撫政策の一つとして、耕地内に寺院建立のためなら、2～4エーカーの土地を1年間1ドルで借用できることが認められていたため、経済的に余裕のない日本人移住者にとっても、日本風の寺院を建立することは可能であった。したがって、都市よりも耕地に寺院が建立された⁵⁾。

後期は、移住者が契約満期になり契約労働から解放され、町に移り住むようになる時期である。後期から、町の寺の歴史が始まる。1913年ホノルル別院が建立され、ヒロ、コナ、モロカイと町に寺が建つようになり、開教活動の基礎が次第に定まるようになる⁶⁾。

開教師としては、ホノルル仮別院を立ち上げた磯部峰仙以後の開教師が後期に赴任したものとなる。なお、本論文は20世紀初頭の曹洞宗を対象にしているため、1920年までにハワイに渡った開教師に限

定して考察を進める。

現存する資料によれば、菅良雲（かんりょうん）が日本語学校、観音講を始めたのが最も古い記録である。布教活動そのものでは、川原仙英（かわはらせんえい）が始まりとされる。また、観音講、裁縫学校、婦人会、日本人学校、青年会などを組織し、現在のハワイ寺院の行っている布教教化の原型を作ったのは岡田大豊（おかだたいほう）であると考えることが出来る。また、磯部峰仙（いそべほうせん）は後期つまり町の寺の時期のはじまりの開教師であるとともに、日本曹洞宗にとって米本土開教の先覚者であるとされる⁷⁾。そこで、以上4名の活動を概観することから始め、その後、前期後期の開教師を比較しつつ、20世紀初頭の開教師の特徴を明らかにしていく。

(1) 4人の開教師

a. 川原仙英

1903年3月18日、曹洞宗ハワイ移住同胞慰問師として、広島県竜雲寺（りょううんじ）住職である川原仙英が派遣され、広島県移民を乗せたコレア丸（Korea Maru）でホノルルに到着した。これが日本曹洞宗のハワイ伝道の始まりとされている⁸⁾。どのような経過で川原がハワイに赴任することになったかは、現在明らかではない。しかし次に述べるように雲竜寺のメンバーもハワイに移住しているため、ハワイに関する情報に接する機会があったことは推測できる。

川原は、初めホノルル市に留まっていたが、まもなく日本の住職地である竜雲寺のメンバーで移民していた神石（じんせき）の厚意によって、ワイパフへ移動した。1903年5月から布教活動を始め、次第に参加者の数が増加したと、川原は日本に報告している。また、同時に日本曹洞宗に対して慰問師の派遣も要請している。しばらくして、曹洞宗の布教所を創立しようとする機運が川原、メンバーの両者から起こった。川原が布教活動の際に布教所建設の基金を募ったところ、1904年8月には約500ドルの寄付が集まった。これを元にして、

1905年10月にワイパフ曹洞宗布教所が完成した⁹⁾。

当時の契約農民の給料は、月給15ドル女性はその半額であり、その収入から2ドル50セントは積み立てに回されていた¹⁰⁾。このような所得状況で、500ドルを短期間に集めることが出来たということは、メンバーの教化に成功していたということが言えるだろう。しかし、川原の布教活動の内容に関しては、資料が残っておらず現在明らかではない。

川原は、その後体調を崩し、1908年ハワイで亡くなる。

b. 菅良雲

菅良雲の渡布時期については、諸説が残っている。1932年発行『カウアイ ワヒアワ日本語学校創立30周年記念誌』編集後記においても、当時より諸説があったことが付記されている¹¹⁾。

現在、ハワイ曹洞宗が採用しているのは、1903年3月川原と同時期に到着したとする説である。これは、1929年に禅宗寺に建てられた記念碑に1903年来布と書かれていることを根拠としている¹²⁾。

しかし、1980年曹洞宗宗務庁より発行された『曹洞宗海外開教伝道史』には、「1904年3月頃、(川原の)慰問師派遣の請願がかない、広島県耽源寺(たんげんじ)住職菅良雲が渡布し、川原の布教所設立事業に協力した。」¹³⁾(カッコ内、筆者)という記述が見られる。

本論文では、1903年到着という説を採用する。これは、カウアイ禅宗寺創立年度が1903年とされていること、また、菅が、ホノルル別院の前身となる薬師堂を建立した光永良悟(みつながりょうご)を得度して弟子にしたのが1904年2月9日という記録が残っていることに基づく¹⁴⁾。ただし、川原と同時にハワイに到着したかは定かではない。

菅の人柄については、「従容録(しょうようろく)などの難しい講義もする学者肌の人物」¹⁵⁾との記述が、前記の『カウアイ ワヒアワ日本語学校創立30周年記念誌』にみられる。

1903年、菅はオアフ島各地を巡回した後、ホノルルの請負人小林(6)

栄之助の紹介で、カウアイ島ワヒアワ耕地のキャンプ巡査高橋直一（なおいち）の許を訪ね、柴尾健一宅に仮泊してから、キャンプの高木常雄宅に一室を借り落ち着いた。月4回その近郊地を巡回し布教に努めた。一方、間もなく、菅の部屋に5・6人の子供が集まり、字を習い始めるようになり、次第に小学校の課程を教えるようになる。これが、ハワイ曹洞宗の学校の始まりと考えられる。そして、メンバーの間から布教所と小学校を設立しようとする案がまとまり、彼らはその土地の所有者であったイギリス人より30坪の建物を譲り受け、1904年2月に小規模なものであるが、布教所兼学校が作られた。

当時、葬式のお礼は2ドルであったが、遠方の場合などは車代に2ドルかかる場合もあったということである。葬儀などからの収入は無いに等しかった。一方、生徒の授業料は月25セントであった。また、1905年には観音講を立ち上げた。最初は、講員33名で、月額10セントをドネーションした。先祖供養からではなく、学校、観音講からの収入により布教所を維持していたと考えられる。

しかし、1905年に日本の耽源寺の後を任せた菅奇雲（かんきうん）が亡くなってしまい、耽源寺の住職に帰ってきてもらいたいという日本のメンバーの要望もあり、1910年に帰国する¹⁶⁾。

c. 岡田大豊

川原は、1903年から教化活動を始め、1905年に本堂を建立する。しかし、1908年突然没する。その後を引き継いだのが岡田大豊である。広島県出身で、1907年に駒澤大学の前身である曹洞宗大学を卒業。翌1908年に27才で川原の没後ワイパフ布教所後任となった。岡田以前の4名の開教師の来布したときの年齢は、37, 46, 38, 34才であったので、27才という岡田は、それまでの開教師よりかなり若かった。また、大学進学率が1%程度¹⁷⁾と低かった当時の日本では珍しい曹洞宗大学出身の僧侶であった。

夫婦でハワイに渡った岡田は、まず開山川原仙英の墓碑を建立した（1908年12月）。以後短期間に、観音講の組織（1909年10月）日曜学

校開設（1910年）仏教青年会（YBA=Young Buddhist Association）を組織（1910年）岡田夫人を主任とする裁縫学校の開設（1910年10月）婦人会を組織（1910年12月）日本人学校の開校（1912年6月）と、次々に教会組織を発展させた¹⁸⁾。

1911年10月、日本より布哇宗教視察員として派遣された忽滑谷快天（ぬかりやかいてん）は、岡田が主任を務める当時のワイパフ布教所の様子を以下のように報告している。

信徒数563名（出張法話所信徒215名を含む）で、毎週土曜日に法話会が開かれ、年分行事は所定のごとく行われていた。付属の教化事業としては、まず裁縫教習学校が新設されて、裁縫の他、料理、礼式等を教授し、女性としての教養を身につけさせ、加えて威儀即仏法の宗旨にのっとり精神修養訓話がなされており、約40名が受講していた。

また「曹洞宗心友会（仏教青年会）」を結成し、仏教教理の解説および実践要綱を教授し「戊申詔書」の趣意を実行する目的をもって、夜学部、演説部、普通部の3部に分かれて組織されていた。

この会は、主として青年を対象としたもので、夜学部は小学校卒業程度のものである必要の教養、知識を教授し、演説部は布教師とともに街頭に立って従事したといわれる。普通部は前両部を補佐するものであった。会員は180名くらいで、基本金80ドルが積み立ててあった。ワイパフ布教所の要であったこの会は、中堅幹部の要請の役割をもっていた。

この他に、毎月28日には吉祥講が開設され、約50名の会員は『修証義（しゅしょうぎ）』を誦読し、その趣旨の解説法話が行われていた。観音講も主として婦人たちによって、40名ほどが参加しており、基本金39ドルを積み立てていた。婦人会は135名で組織され、主として日本人同胞の罹災病患の人々に対し、義損金を募り、これを助けるなど、その功績は甚だ大であった。また布

教師は居留者の出産・死亡届や、願書の代書をして、信徒間に信頼と利益を与えていたことも、見逃すことのできない間接的布教であった¹⁹⁾。

岡田は、教学両面の必要から佐脇昇雲（さわきしょううん）、花井嶺松（はなにいれいしょう）を日本から招いた。岡田自身は本山より米英の宗教学研究を命ぜられて、1914年5月に布教所主任を辞し、米本土へ渡る。その後日本に帰った岡田は、名刹である広島県天寧寺の住職となり、宗務所長、特選議員、宗務院財務部長、庶務部長など、日本曹洞宗の要職を歴任した²⁰⁾。

d. 磯部峰仙

山口県出身の磯部は曹洞宗海外布教の先覚者であるとされる。1908年朝鮮に渡り、1911年仁川（じんせん）に華嚴寺会堂を完成させた。同年9月一時帰国した際に、宗務院において総務弘津説三（ひろつせつさん）・尚署（しょうしょ）織田雪巖（おだせつがん）にハワイに渡るよう勧められた。また山口県出身の移民は広島県に次いで多いということから、在京山口県人の貿易商本重和助（もとしげわすけ）にも説得され、磯部は1913年ハワイに渡った²¹⁾。

磯部の来布以前に、前述のように眼科医の勉強中の光永が菅より得度を受け、光永夫人と共に布教活動をおこなっていた。彼らは、ホノルルに薬師堂を建てるほど熱心であった。この薬師堂は光永の死後、日本曹洞宗へ寄進される。磯部はこの申し出を受け、薬師堂は日本曹洞宗より曹洞宗ハワイ仮別院として認可された。前期の開教師達の活動の積み重ねが基本になっているが、仮別院の認可は曹洞宗ハワイ開教の基盤が作られたことを意味する。磯部は次々と駐在開教師を招き、各地に布教所を増設した。磯部以外の山口県出身の開教師には江沢白道（えざわはくどう）、津田黙龍（つだもくりゅう）がいるが、両者とも最初はホノルル別院に駐在している²²⁾。これは、磯部の招きによるものと推測できる。また、終身に渡ってハワイ開教に携わった駒形善教（こまがたぜんきょう）も磯部の招きに応じたひとりであ

表1 ハワイ開教師リスト²⁴⁾

渡 ハ ワ イ 年	開教師氏名	年齢	大 学	住 所（日本）	住職地 （日本）	級階	駐 在 地	去ハワイ年	滞在 期間 （年）
1903	Kawahara Senei	37		Jinsekigun, Hiroshima	Ryounji	19	Oahu, Waipahu	1908叙	6
1903	Kan Ryouun	46		Miharashi, Hiroshima	Tangeji	27	Kauai, Wahiawa	1910帰国	8
1904	Hirai Ryouki	38		Miharashi, Hiroshima	Beisanji	31	Oahu, Kawaiolo	1915帰国	12
1904	Ueoka Sokyō	34		Miharashi, Hiroshima	Tokujuin	11	Oahu, Aiea / Maui, Paia	1955叙	52
1908	Okada Taiho	27	1907曹大卒	Innosimashi, Hiroshima	Kinrenji/ Tenneji	22/67	Oahu, Waipahu	1914来本土へ	7
1909	Yahara Hoshu	46		Toyotagun, Hiroshima	Kejuin	13	Kauai, Wahiawa	1915帰国	7
1913	Isobe Housen	35		Shinmanyoushi, Yamaguti	Kegonji	41	Oahu, Honolulu	1922来本土へ	10
1913	Sawaki Shoun	26		Sekishi, Gifu	Sejuin	30	Oahu, Waipahu	1916来本土へ	4
1914	Kodama Kaiseki	不明	1913曹大卒	Tamashi, Tokyo	Daihukuji	46	Maui, Paia/ Hawaii, Kona	1918帰国	5
1914	Hanai Reisho	28	1913曹大卒	Ayamagun, Mie	Manji	21	Oahu, Waipahu	1917帰国	4
1915	Arahara Kenzan	28	1914曹大卒	Takayamashi, Gifu	Dairyuji	13	Oahu, Kawaiolo	1920帰国	6
1915	Takenaka Shudo	30		Toyotagun, Hiroshima	Fukujuin	21	Kauai, Wahiawa	1920帰国	6
1915	Ezawa Hakudo	41		Koukyogun, Yamaguchi	Dogenji	25	Hawaii, Hilo	1919帰国	5
1916	Tsuda Mokuryu	不明		Tokuyamashi, Yamaguchi	Jokoji	42	Oahu, Honolulu/ Oahu, Aiea	1927来本土へ	12
1916	Inoue Doryu	不明	1911曹大卒	Takayamashi, Gifu	Unryuji	48	Oahu, Waipahu	1920帰国	5
1917	Kanbara Giko	不明		Miharashi, Hiroshima	Hojoji	36	Oahu, Honolulu/ Maui, Paia/ Hawaii, Kona	1926帰国	10
1917	Murakami Kenshu	不明	曹大中退	Otsukishi, Yamanashi	Horinji	22	Hawaii, Hilo/ Kauai, Wahiawa	1925帰国	9
1917	Nakayama Hozui	29	曹大中退	Shironeshi, Nigata	Chozanji	41	Oahu, Waipahu/ Molokai, Kamakakai/ Hawaii, Kona	1922来本土へ/ 1925日本よ り再来布/ 1947帰国	29
1918	Kakura Meido	不明	1917曹大卒	Tenryushi, Shizuoka	Komyoji	23	Hawaii, Kona	1922帰国	5
1919	Inoue Fuzan	39	1905哲学館大卒	Kiakanbaragun, Nigata	Komyoji	20	Hawaii, Hilo	1922帰国	4
1919	Komagata Zenkyo	33	1913曹大卒	Minamiuonumagun, Nigata	Ryukokuji	47	Oahu, Honolulu	1972叙	54
1920	Kinoshita Reigyū	26	1918曹大卒	Toyonogun, Osaka	Chosenji	31	Oahu, Kawaiolo/ Hawaii, Hilo	1921来本土へ/ 1923帰布/ 1928帰国/ 1937再来布/ 1941帰国	13

る²³⁾。

(2) 日本での出身地

川原から矢原までの前期における開教師6名の日本での出身地は広島県である。現在の住所が三原市であるものが3名、豊田郡1名、因島市1名、神石郡1名である。三原市は豊田郡に隣接しており1936年に市として成立したのであり、当時は豊田郡に含まれていた。因島市も1953年に成立した市であり三原市と隣接している。磯部以後の後期の開教師においても広島県出身者が2名いるが、竹中は豊田郡出身であり、井上は三原市出身である。なお、川原の出身地である神石郡は三原市より直線距離で40kmほど離れている。

つまり、川原以外の前期の開教師はみな広島県の中でも当時の豊田郡を中心とする地区出身者である。現在の三原市の面積は204.74平方km、豊田郡312.53平方km、因島市39.76平方kmである。広島県の面積が8477.58平方km、日本の面積が377835平方kmということから次のようなことが言える。

当時の開教師は、日本国土の約2%にあたる広島県出身者であり、広島県の中でも約6%の面積の地区出身である。この面積は、日本国土の中で0.1%に過ぎない。

また、人口においても同様のことが言える。当時の資料が入手できなかったので、2003年のものになってしまうが、参考までに数字をあげておく。三原市人口81121人、豊田郡59193人、因島市27350人、広島県2878677人、日本1億2759万人（日本人口は1万以下四捨五入）。

つまり、前期の開教師は日本人口の約2%の人口が居住する広島県の約6%の住民が住む地区、つまり日本人口からすると約0.1%の国民が居住する地区から輩出している。

面積、人口ともに日本の中0.1%に過ぎない、一つのまとまった地区から開教師が派遣されている。川原は、多少離れた地区の出身に

なるが、豊田郡は面積381.81平方km、人口（2003年）12011人である²⁵）。したがってこれを加味しても先の数字に変化はない。距離的にも40kmほど離れているだけである。以上より、日本国内でハワイ日系移民に対する布教活動に興味を持つ日本国内の曹洞宗僧侶は、ごく一部の地域の者に過ぎなかったといえる。

それではなぜ前期の開教師の出身地が広島県に偏ったのであろうか。これは移民出身県別人口より推測できる。

表2は1924年現在の日本人移民の出身県別人口を順に並べたものである。当時の移民には広島県出身者が多く、移民全体の24%をしめていることがわかる。川原は前述のように広島県移民が中心となる移民船に同乗してハワイに渡った。その後の平井隆機、植岡祖暁も移

表2 移民出身県別人口表²⁶

Hiroshima	30534
Yamaguchi	25878
Kumamoto	19551
Okinawa	16512
Fukuoka	7563
Nigata	5036
Fukushima	4936
Wakayama	1124
Miyagi	1088
Okayama	727
Yamanashi	581
Ehime	538
Shizuoka	487
Tokyo	461
Chiba	434
Fukui	396
Kgoshima	381
Kouchi	364
その他	8777
合計	125368

民船でハワイに渡っている。また川原は、自坊竜雲寺のメンバーの誘いで、ワイパフに移動した。

以上のように、移民の多い広島ではハワイに関する情報が多かったと考えられる。また、川原の出身地である神石郡を除き、他の開教師の出身地は海に接している。船で渡航する時代においては、このことも海外の情報の入手には好都合であったと推測できる。

一方、後期になると開教師の出身県は広島県に限定されなくなる。磯部峰仙は山口県出身であり、初めての広島県以外で開教師となった。磯部に招かれた江沢、津田も山口県出身であった。また磯部以後にも、広島県出身者は2名いるが、広島県や山口県に偏るといふ現象は見られない。東京、三重、岐

阜、山梨、新潟、静岡、大阪というように、出身県は多岐にわたる。これはハワイ開教に目を向ける者が、一部の地域に限定されず、日本各地に広まったことを意味する。そして、磯部から始まるこの時期に、ハワイ開教が曹洞宗にとって重要な意義を持つと日本側に認められたことの現れでもある²⁷⁾。

(3) 曹洞宗大学

磯部以降の後期開教師では、16人中10人が大学出身者（中退含む）であり、その割合は6割を超える。残りの6人の内、3人は磯部をはじめとする山口県出身者であり、2人は前期の流れに沿った広島県出身者である。一方、大学出身者の出身県は多岐にわたる²⁸⁾。そして1920年より第2次世界大戦が始まるまでにハワイに渡った開教師は31名であるが、その内27名が大学出身である。これは87%にのぼる数字である。当時の日本における大学進学率は『文部省年報』によれば、1910年1.0%、1915年1.7%に過ぎない²⁹⁾。したがって、開教師の中で大学出身者の割合は非常に高いと言える。

前記のように忽滑谷は報告の中で、「布教師が居留者の出産・死亡届や、願書の代書をして、信徒間に信頼と利益を与えていた」と述べている。これは、岡田が英語教育を受けた経験があることを意味する。このように英語教育を受けた者が開教師となることは、メンバーにとって望ましいことであった。したがって、開教師に大学出身者の比率が高い理由の一つとして、日本側に対し開教師派遣の要請があった場合などに、既に日本の大学において英語教育を受けている者が選ばれるケースが多かったということがあげられる。

ではどうして曹洞宗大学（以後、曹大と略記）なのであろうか。具体的な数字は残っていないが、曹洞宗寺院の子弟が大学に行く場合、曹大に行く確率が非常に高かった。現在の日本でも同様に、曹洞宗寺院の子弟が大学に進学する場合、曹洞宗立大学つまり駒澤大学、愛知学院大などを選択する確率が高い。これは宗学仏教学を専攻すること

ができるからである。

また、岡田が花井を招いたように、個人的な繋がりで開教師となるケースも見られる。これは、やはり英語に堪能な方が好ましいという要因から、大学の後輩を誘うというケースである。そして、曹大出身の開教師が多くなるということは、曹大においてハワイ開教の情報が入手しやすくなることを意味する。前記において、開教師がハワイの情報を入手しやすい地理的状況にあった広島県出身で占められていたことと同様である。

(4) 年齢

ハワイ赴任時の年齢、滞在期間、級階に関しては前期後期で際だった差違はないので、前後期と区別しないで考察する。平均年齢は、33.9歳である。曹大出身者以外の平均年齢が37.2才であるのに対し、曹大出身者のそれは28.5才となり、9才近く若い。

(5) 級階

現在日本の曹洞宗寺院には、その檀信徒数などを基準として寺院の運営規模を示す級階³⁰⁾が宗務庁より付けられている。19世紀初頭のもは入手できないので、1999年のものである。したがって、あくまで参考にしかならない数字である。しかし曹洞宗は、江戸時代以後寺請制度、檀家制度と結びついて存在してきた伝統日本仏教である。人口流入が激しい都心部においては短期間に大きく変化する場合があるが、地方寺院においては、あまり急激な変化は見られないのが通常である。したがって、現在の級階を用いて、開教師の出身寺院の規模を推測することは可能であると考える。

1999年曹洞宗宗務庁発行『明日の宗門』では、30級以下の場合に兼代務寺院が多く（26.7%）、31級以上の場合には本務寺院が多く兼代務寺院の割合が少ない（4.4%）と報告している³¹⁾。本務寺院とは専任の住職がいる寺院であり、兼代務寺院とは専任の住職がおらず他の

寺院の住職がその寺院の住職を兼ねている寺院である。一般的に、兼代務寺院の場合メンバーの先祖供養などの法要が少ないので、他の寺院の住職が兼任することが可能であるが、本務寺院の場合、法要の数が多いため専任住職が必要となる。なお、日本の曹洞宗寺院数は、30級以下の寺院9029ヶ寺、31級以上の寺院4725ヶ寺で、割合は、それぞれ65.7%、34.4%である³²⁾。

開教師22名の住職地の級階の平均は約31であり、後期に割合の高くなる曹大出身開教師の住職地平均級階は36となる。（岡田は住職地を2つ持つが、大きい67を用いた。）このことは、開教師の日本における住職地は法要などで比較的多忙な寺院である可能性が高く、他の寺院の住職に兼務してもらうことが難しいことを意味している。

⑥ 滞在期間

最初に指摘できることは、終身ハワイに留まる開教師は少数であるということである。22名の開教師の中、ハワイで没したのは3名である。川原は短命であったため、滞在年度は短い、他の二人滞在期間はそれぞれ、植岡祖暁（うえおかそきょう）52年、駒形善教（こまがたぜんきょう）54年にわたっている。この3名を除く19名の開教師の平均滞在年数は8.5年である。

ハワイ布教に終身を捧げる者が少なかった理由の一つとして、開教師がさらに新天地を求めて米本土に渡ったこともあげられる。22人の開教師中、6人つまり、27%がハワイでの開教師を辞し、米本土に渡っている。

また、ハワイにおいて影響はほとんど見られなかったが、米本土ではこの時期に排日運動が高まりをみせ、日米紳士協定締結、排日土地法制定などがおこなわれた。しかし、ハワイでも労働条件改善のために1920年日本人6万人が参加する6ヶ月間のストライキが勃発したことを契機に、1924年排日移民法ともいわれる「合衆国移民法」がハワイでも施行された。1920年にはハワイ政府は「外国語取締法」

を制定して日本語学校の取り締まりを始めてもいる。また、当時のハワイ砂糖耕地における治安状況はあまり良くなかったという記述も見られる³³⁾。このような社会情勢も開教師が帰国する要因の一つであったとされている。

一方、開教師の滞在期間が短くなる要因として、日本の事情も指摘することが出来る。日本の曹洞宗寺院においては明治以降、血縁者が寺院を継ぐのが一般的となり³⁴⁾、メンバーも幼少より親しんでいる寺院の子弟が寺を継ぐことを望む場合が多い。これらの要因から、開教師は日本の住職地のメンバーから早期の帰国を望まれる場合が多くなる。そして、前節で論じたように、開教師の日本での住職地は専任の住職が必要とされた可能性は高い。

前述の菅のケースでは、自己の住職地を継がせた弟子、つまり子弟が死亡したことが帰国する要因の一つとされている。この場合は順序が逆になるが、日本の寺院を相続するために帰国するという点では同様のケースであるといえる。メンバーが一般に自分たちの顔見知りである血縁者が寺院を相続することを望んでいるという点では、同様のケースとみなすことが出来る。

(7) 帰国後の開教師

日本では、磯部の要請により1915年曹洞宗宗議会において、ハワイは「曹洞宗准布教区」とされた。1916年の宗議会では「曹洞宗布哇布教規定」が「朝鮮布教規定」と併せて制定された。これまで、ハワイ布教は一括して「海外布教」として扱われていた。当時この議案には時期尚早との声も強かったといわれる。この理由は予算上の問題で、「海外布教」のままであれば、経費は海外費500円の枠内ですむが、規定を設けた場合年々特別布教費が増大する恐れがあるからであった³⁵⁾。この規定が制定されたということは、日本曹洞宗にとってハワイ開教が重要な意義を持つと認められたことを意味する。このようなことから、ハワイ開教経験者が帰国後に曹洞宗の要職に付くこと

も多くなった。

岡田は、7年に渡る（正確には5年4ヶ月間）ハワイ在住を終え、米本土に渡った後日本に帰国する。帰国後は、前述のように、名刹天寧寺の住職となり、曹洞宗の要職を歴任した。岡田以外にも、帰国後要職につく開教師は多かった。児玉介石（こだまかいせき）は福田会（ふくだかい）主事、花井は北海道特派布教師・北支布教総監部主事となり、荒原見山（あらはらけんざん）は宗務院財務部主事・宗会議院、竹中修道（たけなかしゅうどう）は中国布教管理 (Superintendent of Propagation in China)・広島県宗務所長・宗会議院、井上道雄（いのうえどうゆう）も帰国後、満州布教総監部主事・特派布教師・宗会議院、木下靈牛（きのしたれいぎゅう）は特派布教師となった³⁶。

3 日本からの訪問者

開教師ではないが、ハワイを訪問し影響を与えた曹洞宗僧侶も存在する。本節では、忽滑谷快天（ぬかりやかいてん）、日置黙仙（ひおきもくせん）、新井石禅（あらいせきぜん）の3名を取り上げることにする。

a. 忽滑谷快天

忽滑谷は、1911年欧米留学へ向かう途中、ハワイ宗教視察員として10日間ほど滞在した。その際、ワイパフ中学校、カワイロア中学校、ハワイ中学校、ポールシティー本願寺小学校など、曹洞宗とは直接関連のない学校でも講演をおこなった。そして前述のようにワイパフ布教所の状況など、ハワイの現状を日本曹洞宗の中央に紹介した。また、日置の来布を促した人であるともいわれる³⁷。

忽滑谷は1914年留学より帰国し、1919年曹洞宗立大学教頭、1921年学長となる。1925年には曹洞宗立大学を駒澤大学と改称して初代学長となった。開教師に曹洞宗立大学駒澤大学出身者が多い理由の一つに、直接の関連を示す資料は見つけられないが、忽滑谷の影響があったということも考えられる。

b. 日置黙仙

1915年7月専門道場可垂齋（かすいさい）住職日置は米国桑港仏教会の招聘により、山上曹源（やまがみそうげん）を随行として、サンフランシスコで開催されたパナマ大博覧会中の世界仏教大会に出席する際に、ハワイを訪問した。往路の途中に1日、復路の際には30日ほどハワイに滞在している³⁸⁾。

往路の際、各宗教連合で講演会を開催しようという動きが起こり、曹洞宗側が本派本願寺開教師今村恵猛（いまむらえもう）に相談したところ、キリスト教系の金曜会が主催し中央学園において開催されることとなった。この時の講師は、日置と、日置と同船であったキリスト教教師海老名弾正（えびなだんしょう）、山岳学者としても有名であった経済人小島久太郎（こじまきゅうたろう）の3人であった³⁹⁾。忽滑谷の本願寺小学校においての講演や、このような講演会が成立するという事は、ハワイに渡った日本の各宗教の聖職者達は、互いに孤立していたのではなく、ある程度交流があったことを示している。

復路の際には、日置はホノルル仮別院に滞在して各地で講演会を開いた。ハワイ島のヒロも訪れ、6日間にわたりヒロ在住の有力者や禅宗に縁のある人たちに接見した。その時日置は、この地に曹洞宗の寺院を建てることの重要性を皆に説いた。そして、後日適任者を派遣するから協力援助をお願いしたいと伝えて、帰国したといわれる。この時日置がヒロの有力者などと対話できるように協力してくれた人物の一人に、浄土宗明照院（みょうしょういん）の住職清水観鏡（しみずかんせき）がいた⁴⁰⁾。これも前述のケースと同様に、日本仏教各宗派には互いに協力するという側面があったということを示すものである。

日置の訪問が契機となり、寺院建立の動きが起こり、1916年江沢白道（えざわはくどう）がホノルル仮別院より派遣され、「新町仮布教所」を開設する。これがヒロ大正寺の始まりである⁴¹⁾。このように、日置の来錫はハワイ曹洞宗布教に影響を与えるものであった。

一方、日置は9月14日に当時のハワイ知事ピンカムを表敬訪問している。その際日置が「自分は米本土でウィルソン大統領と会見し、世界平和に尽くして頂きたいと要望してきました。どうか、ハワイにおいても平和と安寧に暮らす日本人同胞に対して、今までと同じようにこれからも擁護をよろしくお願いするために参りました。」と述べると、ピンカムは答えて「……在留日本人の擁護に関しては、私ではできる限りのことをしようとしている。しかし、あなたの国の方たちがそれを享受するかどうかはその姿勢にかかっているといえます。外国人が他国の主権下において安寧を保ち、統治者の擁護を受けるためには、自己固有の習慣風俗に固執することなく、できるだけ移住国の市民の風習に慣れようとする姿勢が必要です。そうでなければ、文化的軋轢が生じてしまいます。」と述べている⁴²⁾。知事の言葉は、日本の慣習を維持する日系1世社会、日本の教育を与える日本語学校に対してものだと思われる。

日置は日本に帰る際、ホノルル仮別院の磯部に対して「もしハワイ布教に一段落を告げたならば、米本土に赴き北米の天地に洞門の薫香を伝え、化導の任にあたってくれ。どうしても海外伝道は経験のある者でなければ成功はおぼつかない。宜しく頼む。そして、決して日本へ帰ろうという気を起こしてはならない、布教は終身その土に帰する決心がなければならぬ。」と言い残したといわれる⁴³⁾。

なお、日置は帰国後1916年大本山永平寺66世住職となっている。

c. 新井石禅

1919年にホノルル別院の庫裏が完成し仮別院より移転した。1920年には別院本堂が完成し、別院入仏慶讃法要をつとめるために全島開教師並びに檀信徒代表が協議をした。その結果、大本山總持寺住職・曹洞宗貫首であった新井石禅に法要の導師を依頼することとなった⁴⁴⁾。

1920年2月に始まるオアフ耕地での6ヶ月にわたる大規模なストライキのため落成式は延期されたが、1921年7月3日に挙行された。

新井は、随行員である前宗務院総務祥雲晩成（さくもばんじょう）、新井石龍（あらいせきりゅう）、甲山玄道（こうやまげんどう）、および米本土視察を兼ねた来馬琢道（くるまたくどう）と共に来布した⁴⁵。法要は盛大におこなわれ、その模様は地元の英字新聞ハワイタイムスにも大きく取り上げられた。両本山より別院に寄贈された別院本尊釈迦牟尼仏像を磯部・駒形善教（こまがたぜんきょう）両開教師が捧持し、車90台を列ねてホノルル別院までパレードし、その沿道は人垣で埋まったと伝えている。

新井ら一行は、1ヶ月間にわたり、マウイ・ハワイ・カウアイなどを巡教し、8月17日に別院に戻った。翌19日より5日間の授戒会が開催され、戒弟（かいてい・参加者）は、有髪比丘（びく・男僧）3名、有髪比丘尼（びくに・尼僧）13名、優婆塞（うばそく・在家男性）100名、優婆夷（うばい・在家女性）180名であり、現代の授戒のように年配者中心のものではなく、大半が中壮者であった。授戒会中の説教は、祥雲・新井（石龍）・甲山および開教師磯部がおこない、午後と夜間の説戒は新井本人がおこなった。非常に盛況な授戒会であったと伝えられている。現在、日置と新井の来布は、その後のハワイ曹洞宗の教団発展の契機になったとされている⁴⁶。

一方、8月7日には磯部の計画により、非日系アメリカ人教化の意味でハワイ知事ファーリントン、税関長、ハワイ大学長、知名な経済人、商業会議所長、非日系キリスト教牧師、ハワイ代表の26新聞社長などを招待し、新井を主賓にした晩餐会がアラモアナホテルにおいて開催されている。この晩餐会に先だって、その幹旋を当時のハワイ総領事矢田長之介（やだちょうのすけ）に磯部が依頼したところ、「磯部さん、新井禅師は日本における大高僧には違いないが、白人にはこの催しは成功しまい。これは止したらどうですか。」と返答があったとされる⁴⁷。

この晩餐会中に、新井による30分間程度の講演がおこなわれた。タイトルは「仏教と世界平和」であり、自分が救われる前に他人を救

うことが重要であるとする大乘仏教の精神について説いた。翌日の英字新聞ハワイタイムスは新井を評して「東洋におけるキリストの再来」と社説に掲載した。8月9日にはハワイ副知事イワケヤが知事代理として、またホノルル市長ウィルソンが出席者一同の代表として、別院に答礼のため訪れた。その際イワケヤは次のように述べた。

「私どもは仏教がいかなるものかを知らなかったために、今まで仏教はアメリカの国体に反するものとして30年が経過しました。しかし一昨日夜初めて新井禅師のご高説を拝聴してその誤解が取り除かれた思いをしております。同時に真の仏教をこのハワイにはもちろん、米本土にも布教されて成功されることを望みます。ハワイに伝道される際には我々は及ぶ限りの力を尽くさせていただきます。これは知事を初め我々一同の希望することです。しかしもし万が一その布教方針を誤った場合は、我々が今まで抱いてきたものと同様の誤解を世間に広めることになってしまいますのでご注意ください⁴⁸⁾。」

このような非日系アメリカ人に対する教化活動は、少なくとも曹洞宗においてはなされたことがなかった。また、副知事の答礼から他の日本仏教各派においても非日系人に対する布教活動はあまりなされてはいなかったことが推測できる。この晩餐会を企画する段においても、「万一不成功の場合は一宗門の管長として百万の信徒に申し訳ない。」と反対する声が多かったといわれる⁴⁹⁾。この晩餐会は曹洞宗の日系人以外に対する教化活動の始まりとして、注目すべき事例だと思われる。

また、新井は日本に帰る際に磯部に対して「アメリカ大陸に伝道してくれ」と伝えたとされる。磯部は、先の日置の言葉とこの新井の言葉が契機となり、アメリカ本土へ移る決心をしたと後に記述している⁵⁰⁾。1914年岡部大豊も、本山より宗教学研究を命じられて米本土へ渡っている。この2例は、ハワイ開教の次の段階として米本土開教を重視する当時の日本側の姿勢を示している。

4 教団組織の発展

(1) 他宗派の動向

ハワイの曹洞宗寺院の展開を考察する場合、他の日本仏教各派の動向と比較することも必要であると思われる。下記の表は、各宗派最初の開教師渡布年、開教師名、1930年当時の布教施設、付属組織である⁵²⁾。

a. 本派本願寺

1889年 曜日蒼龍（かがいそうりゅう）

別院1、布教所35、説教所26

仏教青年会、処女会、日曜学校、中等学校、ハワイ高等女学校、フォート学園、パラマ学園、別院教団、護持会

b. 浄土宗

1894年 岡部学応（おかべがくおう）

開教院1、布教所18

明照会（みょうしょうかい）、双葉会（ふたばかい）、日曜学校、念仏講、ハワイ女学校

c. 日蓮宗

1900年 高木行雲（たかぎぎょううん）

開教院1、布教院数カ所

村雲婦人会（むらくもふじんかい）、妙法廣布会（みょうほうこうふかい）

d. 大谷派本願寺

1900年 漣静（さざなみしずか）

別院1、支院1、布教所5

護持会、婦人会、青年会、日曜学校

e. 真言宗

1914年 関栄覚（せきえいかく）

別院1、布教所23

表3 寺院及び付属組織リスト(5)

NAME OF CHURCH	Betsuin Shoboji	Taiyoji	(Ryusenji)	Taiheiji	Taishoji	Daiufukuji	Zenshuji	Mantokuji	Guzesji	(Tomonji)	(Sotoji)
所在地	Oahu, Honolulu	Oahu, Waipahu	Oahu, Kawailoa	Oahu, Aiea	Hawaii, Hilo	Hawaii, Kona	Kauai, Wahiawa	Maui, Paia	Molokai, Kaunakakai	Oahu, Waiahole	Oahu, Ewa
Founder	Isobe Hosen	Kawahara Syunei	Hirai Ryuki	Tsuda Mokuryu	Ezawa Hakudo	Kodama Kaiseki	Kan Ryoun	Ueoka Sokyo	Nakayama Hozui	Fujisawa Syunan	(Okada Taiho)
布教の始まり	1913	1903	1904	1917	1916	1914	1903	1904	1927	1927	1910
Date of Founding	1913	1905	1906	1918	1916	1914	1904	1907	1928	1930-55	1945-99
信徒概数	500	450	250	170	450	200	250	500	不明	不明	不明
JAPANESE SCHOOL	1932	1912	1906	1928	無し	1947	1904	無し	1928	1930	無し
教員数	不明	3	3	不明	無し	0	3	無し	不明	不明	無し
生徒数	不明	159	155	不明	無し	0	197	無し	不明	不明	無し
SUNDAY SCHOOL	1925	1912	1925	1924	1927	1922	1922	1923	1952	1930	1947
生徒数	150	170	150	96	不明	78	136	50	不明	不明	不明
KANNON-KO	1922	1909	1920	1929	1916	1936	1905	不明	1928	不明	1925
会員数	150	22	25	65	250	不明	33	不明	不明	不明	約20
支部	6	1	1	0	20	0	0	不明	不明	0	0
会員数	220	40	不明	0	400	0	0	不明	不明	0	0
FUJINKAI	1919	1910	1915	1929	1916	1915	1951	1963	1952	不明	1922
会員数	250	150	不明	不明	60	57	100	200	不明	不明	35
YBA	1923	1910	1915	1919	1925	1915	1923	1935	1953	不明	1948
会員数	90	53	不明	15	不明	40	25	不明	不明	不明	不明
処女会	1925	1919	不明	1921	不明	1921	1912	不明	不明	不明	不明
会員数	35	60	不明	23	不明	56	23	不明	不明	不明	不明
ZENGAKUKAI	1922	無し	無し	無し	1924	無し	無し	無し	無し	無し	無し
会員数	60	0	0	0	13	0	0	0	0	0	0
ZAZENKAI	1960	1977	1965	1975	1964	1948	1938	不明	不明	不明	不明
その他		吉祥講	開山講	曹洞教団							
設立年		不明	1920	1918							
会員数		不明	65	52							

教団、真友会（しんゆうかい）、婦人会、婦人会、日曜学校、処女会
この他、キリスト教、神道なども日系移民に対して布教活動を展開していた。

(2) 曹洞宗教団の展開

a. 布教対象

はじめに、最初期に設立されたワイパフ太陽寺のケースを取り上げ、どのような日本人を布教対象にしていたのか考察する。ワイパフ曹洞宗布教所は前述のように川原が開いた布教所であり、曹洞宗では最初期にできた布教所である。ワイパフに布教所を開くことになった理由には2説ある。『曹洞宗海外開教伝道史』には次のような記述が見られる。

「ワイパフはすでに1902年、本派本願寺の布教所が新設され、週2回の説教と日曜学校が開設され、宗教的には徐々に開発されつつあった所である。また、砂糖の大製造所があり、そこで働く者は、新潟県出身者が圧倒的に多く、したがって宗門檀信徒も多く、わが宗の開教には好条件の地であった。」⁵³⁾

しかし、『曹洞宗ハワイ開教75年史』には「ハワイ各地を巡錫教化の後、ワイパフの地に同郷の人が多くを知り、ここにとどまり教化をはじめた」との記述がみられる⁵⁴⁾。また、『HISTORY OF THE SOTO SECT IN HAWAII』には「曹洞宗では1903年から、オアフ島ワイパフ耕地、カウアイ島ワヒアワ耕地、オアフ島カワイロア耕地、アイエア耕地、マウイ島パイア耕地と、それぞれ移住者と同地方出身の僧侶が来布し、各地に寺や学校を建て、移住者のニーズに答える布教活動が始まった」との記述もある⁵⁵⁾。

後者の説を、ハワイ曹洞宗は採用している。「それぞれ移住者と同地方」と記述されているが、前章で述べたように前期の開教師は全員広島県出身である。したがって、広島県人を中心に布教したことになる。たしかに、広島県出身の移民は県別では最も多く日系移民全体の

4分の1を占める。また、川原にワイパフの地を紹介したのも広島県人神石（じんせき）であった。

しかし、日本において広島県は「安芸門徒」という言葉があるように、浄土真宗が強く、曹洞宗の檀信徒である世帯は10%以下である。一方、新潟県は曹洞宗のメンバーである世帯が30%を超え、曹洞宗信者の多い地域である⁵⁶⁾。また、県別の移民数でも6番目に多い。

筆者の松浦玉英前総監に対するインタビューの中で、松浦は「初期のメンバーは広島県人が多かったが、当然広島以外の方もいた。」と述べている⁵⁷⁾。したがって、ワイパフの地に居住する者は広島県出身者が中心であったが、新潟県出身者も居住していたと推測する。一般にハワイ開教初期において開教師が、同郷の人との縁故で布教所の場所を決定するケースは多かったが、その場合も布教対象を同郷の者に限定したという記録は見当たらない。

b. 日本語学校

ワイアホレ洞門寺の場合、創立時から教団組織はなくワイアホレ地方人会によって維持されていた。1952年の数字しかないが、50戸の地方人会は曹洞宗メンバー10%、日本仏教宗派に属さない沖縄県出身者60%、本派本願寺門徒30%であった。沖縄県出身者と本派本願寺門徒が大多数を占める地域にも、曹洞宗寺院は設立された。ワイアホレ地区は、ワイパフ耕地への灌漑用水トンネル工事のため、当時多数の日本人が居住し、子弟教育のため日本語学校の開設が要望されていた。1930年開教師藤原秀南（ふじわらしゅうなん）は日本語学校開設と共に布教所を開き洞門寺と称した。洞門寺の場合、開教師の給与は日本語学校からの収入が主なものであった。地方人会が洞門寺を維持していたのも、学校を維持するという要素が含まれていた⁵⁸⁾。

曹洞宗寺院では11ヶ寺中、8ヶ寺が日本語学校を併設している。日本語学校を持たない大正寺においても1928年夜間中学、萬徳寺においても1937年家政女学院が開設されている。他の日本仏教各派においても児童を対象にした日曜学校は開催している。しかし1930年

当時学校を経営している宗派は曹洞宗以外では本派本願寺と浄土宗である。そして浄土宗は、ハワイ女学校を経営しているだけである。複数の日本語学校を経営しているのは、本派本願寺と曹洞宗だけである。つまり、曹洞宗のハワイ開教において、日本語学校は重要な存在であったと考えられる。

ハワイにおける日本語学校は、日本人キリスト教牧師によって始められた。1893年年神田重英（かんだしげひで）牧師がハワイ島において生徒数30名ほどの小規模な日本語学校を開設したのが最初である。本格的な日本人小学校は1896年奥村多喜衛（おくむらたきえ）により、ホノルル市に創設された⁵⁹⁾。このことと、ハワイ曹洞宗の間には何の関連性も見られない。では、曹洞宗において、学校経営が盛んになった要因は何であろうか。

本論文ではこの理由を、曹洞宗開教師における大学出身者の比率の高さであると推論する。曹洞宗各寺院において、日本語学校を設立した際の主任開教師は次の通りである。

別院・駒形、太陽寺・岡田、龍仙寺・平井隆機（ひらいりゅうき）、太平寺・吉住浩巖（よしずみこうがん）、大正寺・神原義孝、大福寺・松浦玉英（まつうらぎよくえい）、禅宗寺・菅、弘誓寺（ぐぜいじ）・中山宝瑞（なかやまほうずい）、洞門寺・藤原
これらの開教師の中で、曹洞宗大学出身者でないものは平井と菅である。当時の日本語学校や日曜学校では開教師またはその婦人が教師をおこなうことが通例であった。このため開教師はメンバーより「先生（せんせい）」と呼ばれるようになる⁶⁰⁾。そして児童を対象とした日曜学校の教師は別として、日本語学校で教師を務めることは大学出身の方が得意としていたと推測できる。菅の場合は大学出身者ではないが、前述のように「学者肌の人物」であったと伝えられている。平井の人物像に関する記述は見つけることができなかった。

最初期に開設された布教所である龍仙寺、禅宗寺は共に布教所開設と同時に日本語学校を立ち上げている。太陽寺においても2代目開教

師岡田によって学校が設立されている。この事例は住民から日本語学校開設の要望が強かったことを示している。浄土真宗信者の多い広島県人が4分の1を占める日系移民社会において、なおかつ浄土真宗各派よりも後発の曹洞宗が布教活動を始める際の足がかりの一つとされたのが、日本語学校経営であったと考えられる。

一方、日系移民1世にとって、将来の選択肢は帰国か永住かという2つに分かれた。永住を選択した者にとっては、2世の教育はアメリカ社会に溶け込むためにも英語を重視したものになった。一方、帰国を望む者にとっては、2世の教育は日本語で日本式のものであることが望まれた。したがって、日本語学校もこの要望にそった形で運営された。1890年に日本において発布された教育勅語に基づく国家主義的天皇中心主義の教育であり、日本文部省検定教科書を用いた教育である。このような教育は民主主義のアメリカ社会には受け入れがたいものであった。その結果、1920年ハワイ政府は「外国語取締法」を制定して日本語学校の取り締まりを始めた。しかしこの法律は1928年アメリカ最高法廷で違憲と判断された。1912年から1928年まで曹洞宗において新規に日本語学校が設立されていないのは、このようなハワイの社会情勢によるものである⁶¹⁾。

c. 観音講

学校経営と共に、曹洞宗ハワイ開教の柱となったのが観音講である。1905年禅宗寺で始められた観音講は、11ヶ寺中9ヶ寺で20世紀初頭より設立されている。以下は当時の観音講の様子を記述したものである。

「月例礼拝の日、会場に当たった家では、「観音講」と書かれた赤い大提灯を軒下に出して、夕刻より講員の集まるのを待った。そして、礼拝のあと開教師の説教を聞き、心よりのお接待をしたのである。」⁶²⁾

観音講が設立された理由はどのようなものであろうか。日本曹洞宗はそのホームページにおいて、以下のように曹洞宗を説明している。

The Establishment of the School in Japan (*Nihon Kaishu*)

The essence of the Soto Zen School was transmitted during the Kamakura Period, some eight hundred years ago by Koso Dogen Zenji. The fourth patriarch Taiso Keizan Zenji further enhanced the School and both patriarchs are the two founding patriarchs of the School.

The Main Image of Worship (*Honzon*)

The main image of worship of the Soto Zen School is Shakyamuni Buddha.

The Main Chant

/ Formula as means of offering devotion to the main image of worship (*Honzon Shomyo*)

Namu-Shakyamuni-Butsu

Homage to *Shakyamuni* Buddha

Buddhist Doctrine (*kyogi*)

We are all children of the Buddha and come into this world endowed with the Buddha-Mind (*bushin*). However, failing to realize this, we live selfish, willful lives, causing ourselves much suffering.

If we make repentance to the Buddha and take refuge in him, our spirits will come to rest, our lives will experience harmony and light, and we will rejoice in being of service to society. We will also experience the deep faith that will allow us to stand up under any hardship. To discover happiness and a life worth living here is the teaching of the Soto Zen School.

Buddhist Sutras (*okyo*)

We recite various Buddhist sutras, including the *Shushogi* (Meaning of Practice and Enlightenment), the *Hannyashingyo* (Prajna-Paramita Heart Sutra), *Kannogyo* (The Lotus Sutra) and the *Juryohon* (Revelation of the Eternal Life of the Tathagata).⁶³⁾

上記の解説に乗っ取れば、曹洞宗であるなら観音講ではなく、釈迦牟尼講または宗祖である道元に基づく道元講であるのが自然である。禅宗である曹洞宗は、現世利益をあまり表面に出さず、仏心などに気

づくことが大切といったような哲学的ともみえる教義となっている。

しかし、ハワイの厳しい労働環境の中で、日系1世が望んだのは救済されることであつたのではないだろうか。浄土系仏教における阿弥陀仏のような衆生を救済してくれる存在が求められたと推測できる。釈迦牟尼仏の場合は、苦しむ衆生の救済を専門とする仏ではない。

大乘仏教に属する曹洞宗でこのような役割を果たす存在は、菩薩である。日本において地藏菩薩、観世音菩薩（観音菩薩）が広く信仰されている。この二つの菩薩の役割は分かれており、地藏菩薩は主に死後の救済や長寿といった願いをかなえ、観世音菩薩菩薩は現世での救済をおこなうと信じられている。したがって、ハワイの日系社会の希望に適合する菩薩は、観世音菩薩であつたと推測できる。

ハワイ曹洞宗における観音講の礼拝では『観音經』が読誦された。しかし礼拝後の説教は、1890年に発布された『修証義』に基づくものであつた⁶⁴。曹洞宗では修証義を以下のように解説している。

『修証義』（しゅしょうぎ）は、おもに道元禅師の著わされた『正法眼蔵』から、その文言を抜き出して編集されたものです。

明治の中ごろ、各末派では時代に適応した宗旨の宣揚をしようとする気運が高まっていました。曹洞宗では曹洞扶宗会（そうとうふしゅうかい）が結成され、多くの僧侶や信者の人々がそれに参加しました。

曹洞宗の宗旨は、釈尊から歴代にわたって正しくうけつがれてきた以心伝心の正伝の仏法、只管打坐（しかんたざ）、即心是仏（そくしんぜぶつ）の心を標榜（ひょうぼう）する教えです。

『修証義』は、このような心を日常生活のなかでどのように実践し、信仰生活を高めていくかを示しています⁶⁵。

つまり、ハワイにおける曹洞宗教化活動の特徴として、信仰対象として観世音菩薩を提供するが、説教においては観世音菩薩の救いを説くのではなく、道元の教えを説くという2面性を指摘できる。

観音講以外にも、前述の忽滑谷の報告に見られるように、太陽寺に

は吉祥講が存在した。龍仙寺には開山講、太平寺には曹洞教会が存在した。これらでは『修証義』を読誦し、その趣旨の解説法話がおこなわれており、礼拝対象は釈迦牟尼仏・道元・瑩山（けいざん）であった。つまり、礼拝対象が異なるだけで、説教の内容が観音講と根本的に異なることはなかった。そして1978年発行の『曹洞宗ハワイ開教75年史』にはこれらの組織の記述は見られなかった。吉祥講、開山講、曹洞教会は観音講に吸収されたと考えられる。

d. その他

上述の日本語学校・日曜学校・観音講などの他にも、教団付属の組織として婦人会・仏教青年会（Young Buddhist Association）処女会などが存在した。これらは女性、青年、少女などの教団メンバーがそれぞれに集まり教団の結束を高めるための組織であり、特定の宗教活動をおこなうことを主な目的として組織されたものではない。教団運営の上では、開教師を助けるなど重要な役割を果たしているが、他宗の教団でも同様の組織が存在する。これらには曹洞宗特有の要素は見つけられなかったので、本論文ではこれ以上触れない。

禅学会は仏心会とも呼ばれ、新井による授戒会において在家得度した者によって組織されたものである。それ以後も、授戒会が開催された場合そこで得度した者がメンバーとなっていく⁶⁶⁾。

その他禅宗である曹洞宗独自の組織として坐禅会が考えられる。しかし、最初に設立された禅宗寺においても、それは1938年のことであるので、20世紀初頭のハワイ曹洞宗において坐禅会は存在しなかった。教団メンバーのニーズに適合しているのであれば、開教師は坐禅会を立ち上げていたはずである。坐禅は日系1世の求めるものではなかったといえる。この理由としては、当時の社会事情や温暖な気候を初めとして色々な理由が指摘される。しかし坐禅は、当時の日本においても修行道場以外ではあまり盛んではなかった。したがって、本論文では「20世紀初頭のハワイで坐禅会が設立されなかった理由」という命題に対する推論はおこなわないことにする⁶⁷⁾。

おわりに

20世紀初頭、日本人移民の多い広島県出身の僧侶達が慰問師としてはじめた曹洞宗ハワイ開教は、その後曹洞宗大学出身の開教師が中心となっていった。日本においても、ハワイ布教の重要性が認識されるようになり、開教師が帰国後その経験を活かし日本曹洞宗の要職に付くことも多かった。また、開教師、日本曹洞宗共にハワイ開教の次は米本土への布教と考えたため、ハワイから米本土へ転出する開教師も多かった。

現在、禅宗である曹洞宗は非日系アメリカ人に対する教化活動にも成果をみせ、欧米にはユーロアメリカン禅センターが数多く存在するが、その始まりはハワイにおける新井石禅の晩餐会であったと考えられる。

曹洞宗は、開教師の多くが大学出身者ということもあり学校経営を得意とした。日本語学校は将来帰国しようと考えている日系1世のニーズに応えるものであった。しかしそれは日本的教育だったため、寺院の経営安定をもたらす一方で文化的軋轢を生むという結果ももたらした。

信仰対象としては、釈迦・道元・瑩山よりも、観世音菩薩が中心であった。これは、浄土系仏教の阿弥陀仏に対抗する意味でも、宗教の救済という側面を前面に持つてくることが必要であったためだと思われる。観音講が栄えたが、その説教では観世音菩薩の救いではなく、道元の教えに基づく『修証義』が用いられた。ハワイ曹洞宗教化活動において礼拝対象と説教内容は異なっていた。

注

- 1) 参照 Yoshifusa Senryo Asai and Duncan Ryuken Williams, 'Japanese American Zen Temples: Cultural Identity and Economics,' *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*, ed. Duncan Ryuken Williams and Christopher S. Queen (Richmond: Curzon Press, 1999), 20-35. Yoshifusa Senryo

- Asai, 'The Economics of Soto Temples in North America,' *Tokai Bukkyo*, no. 41 (March 1996), 42–58.
- 2) October 25, 2003, Sheraton Waikikiにて開催されたパネルディスカッションのパンフレット、p. 1.
- 3) Soto Shu Kaigaikaikyodendoshi Hensan Inikai ed., *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史] (Tokyo: Soto Shu Shumuchō, 1980), 129–130.
- 4) *Ibid.*, 130.
- 5) *Ibid.*, 130–131.
- 6) 「ハワイの日本人移住者事情」『ハワイ曹洞宗開教100周年』(The Hawaii Hochi, October 22, 2003), 2.
- 7) 参照 Shozen Hosokawa, '道元禪師シンポジウム イン スタンフォード 随想,' *Sotozen-Net* (Internet, 1999).
- 8) Jiho Mchida ed., *History of the Soto Sect in Hawaii* (Honolulu: Hawaii Soto Mission, 2003), 36.
- 9) *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史], 131.
- 10) Hawaii Kaikyo Sokanbu ed., *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978* (Hawaii: Hawaii Soto Mission, 1978), 8–9.
- 11) 豊田法順（とよたほうじゅん）編『カウアイ・ワヒアワ日本語学校創立30周年記念誌』（禅宗寺 1932）。部分コピーのみの入手のためページ数不明。
- 12) *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 8.
- 13) *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史], 131.
- 14) *History of the Soto Sect in Hawaii*, 39.
- 15) 部分コピーのみの入手のためページ数不明。
- 16) 参照 Koryu Oyama, '開教を振り返り,' *Soto Zen International News Letter*, no. 2 (April 1994). *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 9.
- 17) 『大学・短期大学等の入学者数及び進学率の推移 文部省年報による』(Internet).
- 18) *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 10.
- 19) *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史], 132–133.
- 20) *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 10.
- 21) 参照 磯部峰仙・村野孝顕（むらのこうけん）編『仏教海外伝道史』（ロサンゼルス：北米山禅宗寺 1933）。
- 22) 'ハワイ開教師一覧表,' *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 149.
- 23) *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史], 133.
- 24) 出典 *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978. History of the Soto Sect in*

Hawai. 住所、級階は1997年刊行の曹洞宗宗務庁発行『曹洞宗寺院名鑑』による。井上富山（いのうえふざん）の出身校哲学館大学は現在の東洋大学。ハワイ滞在期間に関しては、月が不明の場合があるので、例えば1903年12月～1904年1月の場合でも2年にわたるという意味で2年と表記した。平均は8年間程度であるので、支障はないと思われる。また初期においては、開教師は慰問師としてハワイに渡る場合もあったが、布教所を立ち上げるにより開教師となるので、煩雑さを防ぐため開教師という名称に統一した。

- 25) 面積人口等は、総務省統計局運営の「統計データ・ポータルサイト」(Internet) を参照した。
- 26) 出典 ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』(布哇日系人連合協会 1964)。
- 27) 日本では、1915年曹洞宗宗議会においてハワイは「曹洞宗准布教区」と認定され、1916年「曹洞宗布哇布教規定」が制定された。
- 28) 岐阜県出身者の佐脇は大学出身者ではないが、曹洞宗大学出身の岡田に招かれ、やはり曹洞宗大学卒の花井と共にハワイに渡っている。
- 29) 『大学・短期大学等の入学者数及び進学率の推移 文部省年報による』(Internet)。
- 30) 級階は、檀徒による点数・信徒による点数・所有不動産による点数・基本金による点数・特別収納金による点数・収益事業からの収入による点数などを基準にして定められる。級階は、寺院に賦課される宗費(大本山費または檀信徒負担金)をさだめる項目の一つの指標である。それは寺院の格式を定めるものではなく、その寺院の経済的な指標を表す一つの目安であると位置づけされている。
- 31) 乙川良栄(おとがわりようえい)・洞外文隆(どうがいはふんりゅう) 編『明日の宗門：1997年「曹洞宗宗勢総合調査報告書」の概要』(曹洞宗宗務庁 1999), 4-5。
- 32) *Ibid.*, 5。
- 33) 『仏教海外伝道史』, 57-58。
- 34) 1997年度の調査で結果であるが、『明日の宗門』, 30. によれば、日本の曹洞宗寺院において、住職の実子が副住職である比率84.3%、住職後任候補者である比率84.8%とされている。これは、血縁者が寺院を引き継ぐ確率が高いことを示す数字である。
- 35) *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史], 134。
- 36) *History of Hawaii Soto Shu 1903-1978*, 14。
- 37) *Ibid.*, 11。
- 38) 『仏教海外伝道史』, 44。

- 39) Ibid., 42.
- 40) 青木俊亨（あおきしゅんりょう）, ‘大正寺沿革略史,’ *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 125.
- 41) Ibid., 125.
- 42) 『仏教海外伝道史』, 48.
- 43) Ibid., 50.
- 44) Ibid., 69.
- 45) *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史], 134.
- 46) *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 12.
- 47) 『仏教海外伝道史』, 74.
- 48) Ibid., 75.
- 49) Ibid., 76.
- 50) Ibid., 90.
- 51) 出典 『仏教海外伝道史』、*History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*. 1932年現在のリスト。当時まだ寺院名を持たない布教所に関しては寺院名をカッコで囲った。曹洞寺観音講のメンバー数は1925年当時のもの。大正寺の禅学会設立年には1929年、1930年とする説も存在する。
- 52) 出典 『仏教海外伝道史』.
- 53) *Soto Shu Kaigai Kaikyo Dendo Shi* [曹洞宗海外開教伝道史], 131.
- 54) *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 100.
- 55) *History of the Soto Sect in Hawaii*, 25.
- 56) 『明日の宗門』, 5.
- 57) October 25, 2003.
- 58) Koryu Oyama, ‘廃寺 洞門寺の沿革概要,’ *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 134–136. 1955年洞門寺の日本語学校は生徒が22名に減少し、増加の見込みがないため閉校となった。これと同時に、洞門寺自体も廃寺とされた。
- 59) *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 37–38.
- 60) *History of the Soto Sect in Hawaii*, 26–27.
- 61) Ibid., 28–29.
- 62) Yodo Oyama, ‘エワ曹洞宗寺の沿革,’ *History of Hawaii Soto Shu 1903–1978*, 104–105.
- 63) ‘Our Soto Zen School,’ (曹洞宗公式サイト) *Sotozen-Net* (Internet).
- 64) *History of the Soto Sect in Hawaii*, 24.
- 65) ‘修証義,’ *Sotozen-Net* (Internet).
- 66) 仏心会では修証義の講読を行事とし、修証義を根本とする布教方針がとられている。観音信仰とは関連のない組織であるが、前述の吉祥講などと

異なり、2004年現在でも存続している。この理由として、仏心会は宗教活動をおこなう組織であることと同時に、「得度者」の組織であることがあげられる。つまり、仏心会は婦人会や仏教青年会などと同じ側面を持つ組織と考えられる。

67) ハワイの坐禅に関しては、Jiho Machida, ‘ハワイ曹洞宗百年の歴史を顧みる,’ *Hawaii Soto Mission Centennial Celebration: 1903–2003* (Hawaii: Hawaii Soto Mission 2003), 52–55 において触れられている。町田はそこで「米本土と異なり、ハワイにはブームと呼ばれる禅はなかった。」と述べている。また、『明日の宗門』によれば、日本の曹洞宗寺院で坐禅会を開催している寺院の比率は、1975年12.1%、1985年39.5%、1995年31.7%である。また1995年における、坐禅会の開催平均は月1回、坐禅会参加者数は平均15.9人となっている。

参考文献

- 森田栄編『布哇日本人発展史』、ワイパフ真栄館、1915年。
- 豊田法順（とよたほうじゅん）編『カウアイ・ワヒアワ日本語学校創立30周年記念誌（Booklet）』1932年。
- 穀部峰仙・村野孝顕編『仏教海外伝道史』、北米山禅宗寺、1933年、ロサンゼルス。
- 木原隆吉編『布哇日本人史』、文成社、1935年、東京。
- 大久保道舟編『曹洞宗大年表』、仏教社、1935年、東京。
- 穀蔵禅戒（こくぞうぜんかい）編『ヒロ大正寺30周年記念沿革略史』、1947年。
- 大川玄道編『ワイパフ太陽寺本堂落慶記念誌（Booklet）』、1949年。
- 松浦玉英編『コナ大福寺35周年記念誌』1950年。
- 穀蔵禅戒編『ヒロ大正寺協会 YBA 大会記念誌』、1952年。
- 駒形善教編『別院本堂落慶記念誌』、1953年。
- 駒形善教編『別院 YBA 大会記念誌』、1954年。
- 『日本現勢：1960年版』、共同通信社、東京。
- 『仏教大年鑑：1961年版』、仏教大年鑑刊行会、東京。
- ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会、1964年、ホノルル。

『仏教大年鑑：1969年版』、仏教タイムス社、東京。

常光浩然著『布哇仏教史話—日本仏教の東漸』、仏教伝道教会、1971年。

ヒロタイムス編『移民百年記念ハワイ島日本人移民史』、ヒロタイムス、1971年。

『曹洞宗続年表』、曹洞宗全書刊行会、1973年、東京。

DeFrancis, Jhon, *Things Japanese in Hawaii*, The University of Hawaii, 1973.

相賀和雄著『ハワイ事情』、ハワイタイムス社、1975年、ホノルル。

曹洞宗海外開教伝道史編纂委員会編『曹洞宗海外開教伝道史』、曹洞宗宗務庁、1980年、東京。

日本曹洞宗では『曹洞宗海外開教伝道史』には不適切な表現が存在するとの理由から、差別図書に指定し、回収を進めてきた。本論文では学術的使用に限定することを前提に、曹洞宗宗務庁に引用許可申請をおこない、宗務庁において‘布哇’127-143をコピーさせていただいた。

乙川良栄（おとがわりょうえい）・洞外文隆（どうがいぶんりゅう）編『明日の宗門：1997年「曹洞宗宗勢総合調査報告書」の概要』、曹洞宗宗務庁、1999、東京。

Mchida, Jiho ed., *History of the Soto Sect in Hawaii*; Honolulu: Hawaii Soto Mission, 2003.